

日本醫事新報別刷 第四一五七号 (平成十五年十二月二十七日)

一 小児科医が説く

「わかりやすい子育て論」

山見文雄

一 小児科医が説く「わかりやすい子育て論」

山 見 文 雄

不登校の増加とその原因の多様化、自殺、いじめ、虐待、常識では理解し難い少年犯罪の多発、ひきこもりなどの最近の現象は社会崩壊を予感させて、誰も他人事ではすまされない事態になっている。われわれ小児科医はもつとわかりやすく子育ての重大性と、子どもを育て方の基準を、今の親たちに説く必要があるのではないか。

筆者は、前記のような日本における社会問題発生の原因は、昭和三十年代からバブル崩壊まで、経済の成長に伴う極端な人手不足からくる家庭生活の余裕のなさ、お金や生活の利便性の追求が中心になった人々の生活パターンの中にあると考える。つまり、こうした中で親はいらいらしながら、子どもの心に関心を持たず、一方で

子どもを便利に育てる、すなわち病気をさせずに大きくして、後は学校に行かせ、テストに合格させればよいという子育てがなされてしまった。一九九〇年代に入ってから社会状況は変わってきたが、若い親たちの不安はむしろ増大し、かつ親たちが戦後世代二代目に入っていることもあり、事態はむしろ悪化し続けている。

人類は二五〇万年をかけて人間の性の発達の上に知性を発達させた。すなわち大脳旧皮質の上に新皮質が発達したのであって、人間性を無視した子育ては、後になって当人ばかりでなく親の人生も社会をも台なしにするという、誰でも知っているような大切な原則が軽視または無視されてきたのである。さて、本論に移る。

(1) 二歳まで

子育てのキーワードは「安心の提供」である。大人でも外出先で自宅のガスの消し忘れを思い出し、買物などできなくなるように、不安に気をとられれば、まともな生活ができない。二歳までの子どもに安心がないと、壊れた脳が育つ可能性が強くなる。二歳までの安心は次の三つによって保証される。

① 家庭の安定。特に父親と母親の関係が荒れて乳児が長期不安にさらされると、悪影響が後に表面化する。本人の記憶に残らない時期の安心も大切である。

② 子どもが可愛がられること、すなわち親から愛されているという実感(例えば、親が忙しすぎては、子どもの側からみて、自分が愛されているという感覚を持ってない)。スキンシップはもちろん大切である。

③ 達成感(例えば、歩行が初めてできた時、親も一緒に喜ぶ等という共感を含む)。

どもは安心して前向きに生き生きしており、そのことは脳が順調に発達しつつあることを示している。

(2) 二〜五歳

キーワードは「人間性の育成」である。人間性の基礎は、喜怒哀楽、すなわちさまざまな情動にある。五歳くらいになると情動は知性と複雑に絡みながら、その後も思春期まで発達を続ける。先に述べたような、愛されることと達成感という人生のおよそ二つの喜びが基盤となる心豊かな人生を送るための、個性化のベースが育っていくのである。子どもにとってこの時代がきわめて重要であることを知らず、親たちは生活に追われて貴重な時を失っていくことが多い。この時期は子どもに人や自然や物との出会いを通じて、多くの喜びや嬉しさがあることを体験させる必要がある。

初期は単純な遊びから後にはハイキング、スポーツ、音楽、絵、手芸、囲碁、将棋、釣り、園芸など、射幸心以外の手ほどこきをしてやるのもよい。プロを育てるといって技

術ではなく、子どもが生きること
をどう感じるか(どう思うか、ど
う考えるかではない)であって、
それそのものが子どもの人生とし
て始まっていく。好奇心をどう育
てるか、少しくらいの苦しさや悔
しさや悲しみを、どううまく体験
させうるかも大切であって、それ
には親子の遊び(短時間でもかま
わない)、あるいは子ども同士の遊
び体験が欠かせない。

子どもたちは、その中で多くの
感動を知り、かんしゃくが役に立
たないことを経験し、我慢も体験
せざるをえない。しかも、それを
親が、嬉しかったね、悔しかった
ね、よく我慢したねなどと、共感
をもって補完し再認識させること
が重要であると思う。絵本による
情動の共感も、大切な要素になる
はずである。その基礎があつて初
めて人は、他人の喜怒哀楽や苦し
みを理解し、人とう向き合つて
いくべきかを知る。

筆者は我慢の価値に関しては、
一九六〇年スタンフォード大学心
理学教室で行われたという「我慢
の実験例」を話すことにしている。

空腹の四歳児を集め、マシユマロ
をみせ、今すぐ食べるなら一個、
一五分待てたらなら二個あげるとい
い、一五分待てずに一個食べた子
どもたちと一五分待って二個食べ
た子どもたちの二群に分け、一
五年後に学力テストをした結果、
その成績に大差が出たのだった。

人間は同じ事態に遭遇したから
といって、同じ喜びや悲しみが機
械的に一様に湧くのではない。旅
一つを例にとつても、旅をして感
激する人もいれば、何の感動もな
い人もおり、時には苦痛に感じる
だけの人もいる。その質と量の違
いはこの時期の幼児体験の如何に
大きく左右されている。ただし、
感動することの大切なこの時期に
決して他人に危害を与えることを
快感と感ぜさせてはならないから、
その時だけは叱らなければならな
い(叱られたこととセットになつ
て、快感は消滅する)。

先天的な素質、過保護、過干渉、
比較差別、テレビの害等について
は今回は触れない。

人間性がよく育った人が人望の
ある人であり、育児の過誤によつ

て人間性が育たなければ、体だけ
が大人になって野生に戻り、将来、
暴力などに走り、犯罪を起こしや
すくなる。また、親から愛されて
いない(たいていの親は大いに愛
しているつもりでいるのにもかか
わらず)と感じて不安の多い乳幼
児期を送れば、何事にも自信が持
てず、将来不登校やひきこもりと
いう事態を招きやすい。さらに、
大人が管理した面白くない日々を
過ごして達成感の喜びを体験しな
ければ無気力な人物が育ちやすく、
我慢が育っていないければ、わが子
の将来について深く思慮すること
もなく感情的になって、安易に離
婚を選択したりする。日本の子ど
もたちは世界の子どもに比べて元
気がないといわれる所以も、この
幼年期に豊かな過ごし方ができて
いないからである。完成した人間
を後で治すのは難しく、犯罪は罰
則強化によって解決するというよ
うな単純な問題ではない。

(3) 五歳以降

十二歳まで

キーワードは「社会性の発達」

を促すことであり、社会には多く
のルールがあること、具体的には
働くことの重要さや、お金の使い
方などについて知り学ぶことが大
切である。そして、家庭における
この役割を「しつけ」と呼ぶ。前
段で述べた人間性の発達を意図し
て育てれば、子どもは必ず親にな
つき、信頼し、かつ尊敬するので
あつて、しつけは親の意に沿つて
ゆくはずである。叱つて教えるな
どという機会は少ないのではない
か。

十二歳以降の思春期、あるいは
反抗期のことについては触れない
が、子どもの幼時の育て方が親が
老後になつてからの親子関係に大
きく関係することにも言及するこ
とにしている。

近年、虐待防止が叫ばれるが、
これは四歳までの理解力がない尚
早な時期に、親が勝手に自分の生
活に都合のよいことをしつだけだ
と、思つて強要するか、子どもがな
つた信賴していない大人が暴力で
強制するため、しつけがしつけに
ならず、虐待になることもあると
思われる。

最後に、筆者は子育てに多大な影響を与える離婚の端緒として意外に多いと感じているケースの防止について話すことにしている。以下は一種の心理的メカニズムと

して説明したもので、いわば夫婦喧嘩のカラクリであり、これと別に「愛は死よりも強し」という永遠のテーマもあるのが人間であるが、ここは多少乱暴とは承知しつつも記述してみる。

人類発生以来、縄文期前まで、男性は共同で狩猟生活をしていたため、共同作業をすることにより共感が生まれ、これが男性同士の重要なコミュニケーションの素材になる。いわゆる「同じ釜の飯を食った仲間」である。男性は女性と結婚し共同生活をして、毎日出勤し毎日帰宅すれば、それだけでコミュニケーションが得られると勘違いしているふうがある。

一方、女性は、男性が狩りをする間、家を守りながら生活の雑事と子育てをしていたので、男性同士のような共感は生じ難い。したがって、各個人の相互のコミュニケーションは主として話すことによって保たれ

た。女性は男性と共同生活で子育てを始めると、将来にわたり夫が自分のものであり続けることによつて、安定した生活を求めているのであり、言葉で愛を語ることによつて、それを永続的に保証されたものとして確認したいと願っているのである。したがって、愛を語ることにへの期待度は男性の想像をはるかに超える。

すなわち、男性のさしている共感による愛の傘は女性の心には通用せず、男性は女性に通じる愛の傘―男性自身にとつては二重に傘をさすことになるので、しばしば菌の根の浮くような感じがする―を言葉で表現しなければならぬというようになる。

女性の日常で最も期待している男性からの愛の言葉が得られないと、不満といらいらが起きやすい。いらいらすると些細なことで喧嘩になる。喧嘩になると女性は感情爆発が起りやすい。感情爆発は男性の尊厳を傷つけるような暴言を生みやすく、男性は女性の意図するところがよくわからないままに家庭崩壊へ移行していくことに

なる。筆者は小児科医として、離婚に至る経緯を知った時、このような解釈が成り立つ例が多いことに気づく。よい子育てのためにも、新婚夫婦たちに予め注意を喚起しておく必要がある。そうである。

筆者自身は、決して子育てが人より上手だったり、あるいは徳を説くような立派な人間ではない。しかし、経済のスパイラルな下降をデフレと呼ぶように、幼児期に心の貧しい育てられ方をした世代がさらに次の世代を育てるという現代社会の悪循環を、何とか断ち切らねばならないと考えている方は多いのではないか。その中の一人として、一小児科医である筆者が永い間考えてきた結論を親たちのためにわかりやすくまとめてみた。ぜひご批判や助言をいただきたいと思つている。

(日南市中央通)